



平成25年4月15日

卓話 『家族を考える～愛と憎しみの関係～』

恵泉女学園大学 大学院平和学科 教授

大日向 雅美 様

私の専門は発達心理学で、また現在、南青山で子育て・家族支援のNPO活動もしております。研究実践活動のきっかけは1970年代の初めに続いたコインロッカーベビー事件で、なぜお母さんが我が子に手を掛けてしまうのか、全国を回ってお母さんたちの声を聴き、育児不安という現象を見出しました。歴史的に見ると子育ては村落共同体、地域ぐるみでした。お母さんが一人で育児をするのは高度経済成長期からなんです。お母さんやお父さんに子どもの成長に喜びを見出してもらうためには地域ぐるみでの子育て支援が必要です。

家族問題の第一、まず夫婦。夫婦のずれの始まりは子育てです。赤ちゃんが生まれてくるまではハッピー。でもやがて妻がつぶやきます。こんなはずではなかった。赤ちゃんって手がかかる。こんなに時間が無いとは思わなかった。また子育て期のお母さんの不満は話し相手がないことにもあります。小さいお子さんと一日いると一語文、二語文しか話せない。たまにでいいから接続詞を使って長い日本語を話したい。一番期待する会話の相手は夫です。でも日本の男性は悪気があるわけじゃないけど仕事で忙しい。たまの土日、家にいる夫に話しかけても上の空でテレビを見ている。ひどいのは途中で遮る。君、何を言いたいの？結論は？これ一番だめです。夫と会話がなく惨めだ。相手にされない。対等性がなくなっている。かくして夫婦の溝が広がっていきます。

40、50になって、これから自分の人生と思った時、次が介護です。地域によっては未だに長男の嫁がやるべきだという考えがある。ある60代の女

性は10年近くお姑さんを介護して無事お見送りしたとき、今度はお舅さんが倒れてしまった。夫も夫の弟妹も当然のように彼女に期待する。彼女は思わず、今度は勘弁して下さいと言ってしまったそうです。

介護しないつもりはないけれど私一人で全部というのは勘弁してという思い。ところが夫は、何故だ、わけを言えというだけ。一言、ありがとうと言って欲しかった。もうこの人と残された人生を一緒に送れないと思ったそうです。

定年を迎えた夫婦に、これからどうしたいかアンケートをとると、夫は妻と第二の人生を楽しみたい、温泉旅行にも行きたい。妻は、あの人とだけは嫌。この年齢になると妻は地域や趣味の活動に活発に動いているのに、定年を迎えた男性は粗大ごみ、濡れ落ち葉と言われる。私は複雑な思いを否めません。男性たちはなぜそうならざるを得なかったのか。

そこで私は地域の子育て家族支援者養成と同時に団塊世代の方々の地域活動の養成も始めました。素晴らしい業績をお持ちの方々にもう一度地域に出ていただき、持てる力を地域のために活かしていただきたい。そうして企画した「子育て・まちづくり支援プロデューサー養成講座」です。もう一度中高年の男性と女性が子育て支援を仲立ちにして、新しい地域を紡いでいただけたらと思います。ありがとうございました。

